

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01745

研究課題名（和文）称賛行動の比較社会生態心理学 - 褒め合う社会と褒めない社会を分けるものは何か

研究課題名（英文）Comparative Socio-Ecological Psychology of Praise Behavior: What Distinguishes Between the Societies of Praise and Non-Praise

研究代表者

結城 雅樹 (Yuki, Masaki)

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：50301859

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,960,000円

研究成果の概要（和文）：他者が望ましい性質を持つことや望ましい行動をしたことを当該の相手や第三者に伝える行動を「称賛」と呼ぶが、これがどの程度頻繁になされるか、またどの程度好まれるかには文化差がある。本研究では、当該の社会で流通する称賛と批判の量や、それらに対する感受性を規定する社会的要因（関係流動性が高いこと）、またそれらがもたらす人々の心理的特徴（自己主張や共感性や内的動機付けが強いこと、向社会的行動の隠蔽など）を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義：従来解明されていなかった、「褒め合う社会」と「批判し合う社会」の違いを生む原因の一つとして、関係流動性（対人関係の選択の自由度）を同定した。褒め合う社会が人々にどのような心理や行動を生み出すのかを明らかにした。

社会的意義：「褒め下手」「褒められ下手」とされがちな日本人が、関係流動性が増加していく今後の社会で、「褒め上手」「褒められ上手」に変わっていく必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：Praise is the behavior of communicating to the individual or a third party that the person has desirable qualities or has performed desirable actions. Previous research has found cross-cultural differences in how often praise is done and how much it is liked. This study has uncovered a social factor (relational mobility) that determines the amount of praise and criticism given in society, people's sensitivity to them, and the people's psychological characteristics they bring about (such as strong assertiveness, empathy, and internal motivation, as well as concealment of prosocial behavior, etc.).

研究分野：社会心理学

キーワード：称賛 社会生態心理学 文化差 関係流動性

1. 研究開始当初の背景

他者の望ましい行為や性質を当該の相手や第三者に伝える称賛行動は、私たちの日常生活で観察されるごくありふれた行動の一つである。しかし、比較認知科学者たちは、称賛行動は他の種では観察されない極めて「人間らしい」行動であるとし、そこで交換される情報が私たちの社会的適応を支えていると指摘している。さらに、社会心理学者や教育心理学者たちは、適切な称賛は子供や成人のモチベーションを高め、また対人関係を強化するなど、称賛の肯定的な機能を指摘してきた。

しかし一方、称賛行動には文化差がある。例えば「日本人は褒め下手」などとししばしば指摘されるように、日本人はアメリカ人よりも、積極的に他者を称賛せず、また他者から公的場面で称賛を受けたときにそれを否定したり、ときにはネガティブな感情を持ちさえする(張・結城, 2017)。もし本当に称賛が人間に特有であり、個人に利益を提供する適応行動であるとすれば、果たしてなぜ、人々が被称賛に対する喜びを感じたり、積極的に称賛行動を示したりする社会と、それが忌避されたり回避されたりする社会とがあるのだろうか。

2. 研究の目的

上記の問題意識を踏まえ、下記の目的を持つ研究を実施した。なお、令和2年に始まる世界的な新型コロナウイルス禍により、特に多国間比較研究や実験室実験が困難になり、課題申請時に予定された研究を全て実施することは叶わなかった。しかし、研究課題に関連するトピックをできる限り柔軟に検討するための方策を尽くし、結果として大変有意義な知見が得られた。

(1) 称賛行動の社会環境要因と心理的帰結の検討：称賛行動の促進・抑制要因として、近接的な社会環境要因である関係流動性 (relational mobility) の効果を検討した。関係流動性は、研究代表者が過去15年以上にわたり世界的第一人者として研究をリードしてきたものである(例えば、Yuki et al., 2007; Yuki & Schug, 2012, 2020; Thomson, Yuki, et al., 2018 PNAS)。対人関係の選択の自由度が高い高関係流動性社会では、自らの価値と優位性をアピールすることが、望ましい対人関係の獲得と維持に役立つ。また、人の優位性に関する情報は、対人関係を積極的に選択する際に有用である。したがって、人々は他者からのポジティブフィードバック、つまり被称賛を積極的に受け入れようとし、また優れた属性を持っていたり、望ましい行動をした他者に対しても積極的に称賛しようとするだろう。一方、対人関係の固定性が高く、対人関係の変更が困難な低関係流動性社会では、自らの突出した優越性のアピールは集団内の不必要な軋轢や競争を引き起こし、社会的な罰や排除の対象になるだろう(いわゆる「出る杭は打たれる」)。したがって、人々は他者からの称賛を喜ばず、他者を公然と称賛することも避けるだろう。

本研究ではさらに、自らの望ましい行為を他者が称賛する期待度の社会差が、それぞれの社会に住む人々の心理・行動にどのような差異をもたらすのかを検討した。本研究では、自己主張、共感性、誇示的消費、内的動機付けといった多様な心理・行動現象を取り上げ、称賛への期待の強さとの関連を検討した。

(2) 被称賛への感情反応の社会差とその原因：人は他者から称賛を受けると、様々な感情を経験する。もし上記の理論(1)が正しければ、高関係流動性社会の人々は公的場面での被称賛に対して誇りを始めとした肯定的な情動を経験するが、低関係流動性社会の人々は羞恥などの否定的な情動を経験しやすいだろう。ここで羞恥を取り上げる理由は、それが将来同様の成功状況を回避させるための対処行動を自らに促したり、その意図を他者にシグナルするといった適応機能を持つとされているからである。

(3) 協力者に対する称賛と非協力者への批判が協力行動に与える影響：関係流動性が低い社会では、協力者に対する批判的言辞がより流通しがちとなるが、それは結果として協力行動の隠蔽を引き起こすだろうとの仮説を検討した。

(4) 追加課題： 転居や進学・新型コロナウイルス禍に代表される社会環境の関係流動性の変化が、人々の心理にどのような変化をもたらすか(もしくはもたらさないか)を検討した。地域の伝統的な生業形態の違いが関係流動性の差や称賛行動の差を生むかどうかを検討するため、稲作方式が大きく異なる南北ベトナムの住民を対象としたオンライン調査を行った。

3. 研究の方法

(1) 様々な国、地域、業界、中学・高校の部活動など、関係流動性が異なることが予期される複数の社会生態学的環境においてオンラインおよび質問紙によるデータ収集を行い、当該環境の関係流動性と、そこで交わされる称賛と批判の期待、さらには人々の心理・行動との関連を検討した。

(2) 関係流動性の変化が人々の心理に与える影響を検討するため、過去の環境の関係流動性を回顧してもらったり、過去に調査に参加した参加者にコロナ禍の下で追跡調査を行うなどした。

4. 研究成果

(1) 称賛行動の社会環境要因と心理的帰結の検討：[研究 1-1] 日本人とアメリカ人の自己主張度の差を、関係流動性とポジティブ評判追求傾向が統計的に説明した。具体的には、関係流動性が高い社会ほど、人々のポジティブ評判追求傾向が強く、それが強い自己主張行動につながっていた。[研究 1-2] 社会の関係流動性の高さが人々の共感性を強めるとの仮説を日米の成人を対象とした国際比較調査で検討した。予測通り、関係流動性知覚が高いほど共感性が高く、日米間の共感性の違いを統計的に説明していた。対立仮説となる文化的自己観の差異では、この差は統計的に説明できなかった。[研究 1-3] 関係流動性が、自己への妨害者に対する人々の対応に差をもたらすとの仮説を検証するため、日米国際比較調査を行った。その結果、反撃の行動意図と反撃に対する他者からの評価期待に文化差が得られるとともに、それらの変数が関係流動性知覚と正の関連を持っていた。[研究 1-4,5] 関係流動性が社会的地位欲求の高まりを通じて誇示的消費行動を促すとの仮説を検証するオンライン調査を日米で実施した。しかし結果は一貫性が低く、今後の解釈と再検討の余地を残した。[研究 1-6] 労働環境におけるリーダーシップの性質の多様性の背後に、労働市場の流動性と、処遇システムにおける成果・能力主義の差異があるとの仮説を検討した。日米のワーキングパーソンを対象としたオンライン調査で、予測通りの結果が得られた。[研究 1-7] 日本のワーキングパーソンを対象とした国内調査で、業界ごとの関係流動性と、従業員の心理・行動傾向との関連を調査した。個人単位の分析では従来の理論通りの結果が得られたものの、業界単位の分析ではいくつかのデータ分析上の困難が見られ、今後の継続的な検討の必要性が示唆された。[研究 1-8] 中学生・高校生の部活動における内的動機付けを高める要因を、指導者と部員の関係、および部員同士の関係における称賛・批判に着目して検討した。その結果、全般的に称賛の有無の影響力が批判の有無の効果よりも強いこと、また特に部員同士の関係性が果たす役割の大きさが示唆された。

(2) 被称賛への感情反応の社会差とその原因：関係流動性が低いことが、他者からの批判を回避する適応課題の重要性を高めた結果、第三者の目前での課題達成に対する羞恥感情を生むとの仮説を、日米成人を対象としたオンライン調査で検討した。[研究 2-1] 予測通り、低関係流動性が、成功者に対する強い批判の期待を通じて、第三者の目前での課題達成に対する強い羞恥感情と関連していた。

(3) 協力者に対する批判の期待が協利行動に与える影響：[研究 3-1] 日・米・中3カ国の成人を対象に、見知らぬ他者に対する向社会的行動の隠蔽に関するオンライン調査を行った。その結果、予測通り日本人はアメリカ人と比べて自らの向社会的行動を隠そうとする傾向にあり、さらにこの文化差は関係流動性知覚と、向社会的行動に対するネガティブ評判期待により媒介された。また、予測通り、競争的協利行動の日米差を、関係流動性認知とポジティブ評判期待が媒介した。一方、中国人がアメリカ人と類似した関係流動性知覚と行動意図を示すなど、一部予想外の結果も見られた。[研究 3-2] 協利行動の隠蔽の文化差を検討した。協利隠蔽傾向が、予測通り、関係流動性の低さ、ポジティブ評判の低さ、およびネガティブ評判期待の高さと関連していた。[研究 3-3] 関係流動性と協利隠蔽との因果関係を検証する実験研究を行った。関係流動性知覚を場面想定法で実験的に操作した結果、低関係流動性状況に置かれたことを想像した人の方が、高関係流動性状況を想像した人よりも、協利行動に対して他者から批判的な評価が寄せられると予想し、協利の隠蔽傾向が高くなっていた。

(4) 追加課題 関係流動性の変化が心理の変化に与える影響：[研究 4-1] 青年期における被称賛、被批判経験が、成人後の行動傾向や心理傾向に与える影響をオンライン調査で検討した。明確な結果は得られなかった。[研究 4-2] 自分が暮らす社会の関係流動性が変化したとき、人はそれに即応して適応心理を獲得し、当該の状況に適応することができるだろうか。関係流動性の低い県に転居した日本人成人を対象に調査を行った結果、高流動性地域からの移住者と低流動性地域からの移住者の間に、明確な心理の差や適応度の差は観察されなかった。[研究 4-3] 過去に

行った調査の参加者に対してコロナ禍の下で追跡調査を行った。標本全体の傾向としては、予想とは異なり関係流動性知覚と心理傾向が変化していなかった。一方、個人内での変動は、理論通りの方向で関連していた。[研究 4-4] 新型コロナウイルスの世界的流行により関係流動性が低下した可能性をふまえ、パンデミック以前の関係流動性を想起法で捉える心理尺度を新たに開発した。その結果、パンデミックの下での現時点の関係流動性知覚よりも、パンデミック以前の想起された関係流動性知覚の方が、日米の参加者の現在の心の文化差をよりよく説明することがわかった。このことは、心の文化差の少なくとも一部は、直近の社会環境ではなく、その個人が長期にわたり暮らしてきた社会環境に適応するよう形作られている可能性を示唆している。

追加課題 生業形態が称賛・批判期待と人々の心理に与える影響：同一国内に暮らす人々の心理が地域間で異なるか、またその社会生態学的要因は何かを検討するため、伝統的な生業形態が大きく異なる南北ベトナムを対象としたオンライン調査を行った。[研究 4-5 および 6] 予測とは異なり、システムティックな差違は見られなかった。またそれ以上に、データの信頼性が一般的に低く、分析に耐えるとは言いがたいものであった。このことは、発展途上国におけるオンライン調査の難しさを物語っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 前田友吾・結城雅樹 | 4. 巻 94 |
| 2. 論文標題 成功時の誇り・羞恥経験の文化差に対する関係流動性の媒介効果 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 心理学研究 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.94.22032 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 14件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 Yiming Zhu, Xiaomin Sun, Masaki Yuki, Zhenzhen Liu, Yue Yuan, Qi Zhao |
| 2. 発表標題 A Social-Ecological Approach to Conspicuous Consumption in Different Societies: the Role of Relational Mobility |
| 3. 学会等名 2023 Annual Converntion of the Society for Personality and Social Psychology（国際学会） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Freeman, Jason; Yamamoto, Shoko; Yuki, Masaki |
| 2. 発表標題 Empathic Concern as a Social-Ecological Adaptation: The Role of Relational Mobility |
| 3. 学会等名 Max Planck Summer Institute on Bounded Rationality（国際学会） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 小楠なつき・結城雅樹 |
| 2. 発表標題 「コロナ禍による関係流動性および一般的信頼の変化 日米における追跡調査による検討」 |
| 3. 学会等名 日本心理学会第69回大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Akari Jin, Masaki Yuki, & Thomas Talhelm |
| 2. 発表標題 The Effects of Rice Cultivation Style on People's Psychological Tendencies: Comparing North and South Vietnam |
| 3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Atsuki Ito, Yugo Maeda, Kentaro Hashimoto, Matthias Gobel, Yukiko Uchida, & Masaki Yuki |
| 2. 発表標題 Prestigious leaders emerge in high job mobility societies |
| 3. 学会等名 2023 Society for Personality and Social Psychology Annual Convention (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 前田友吾・結城雅樹 |
| 2. 発表標題 関係流動性が成功状況での感情経験に影響するメカニズム：シグナリング仮説の検討 |
| 3. 学会等名 日本社会心理学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yugo Maeda, Masaki Yuki |
| 2. 発表標題 Why does relational mobility affect pride and embarrassment for success? A test of a signaling function hypothesis |
| 3. 学会等名 Society for Personality and Social Psychology (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Akari Jin, Masaki Yuki, Thomas Talhelm |
| 2. 発表標題 The effects of rice cultivation style on people's psychological tendencies: Comparing North and South Vietnam |
| 3. 学会等名 2021 Annual Converntion of the Society for Personality and Social Psychology (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yuki, M., Li, W.Q., & Ogusu, N. |
| 2. 発表標題 The Relational Mobility Before COVID-19 scale: How changes in the social environment do or do not affect the psychological tendencies of people who reside there |
| 3. 学会等名 2021 Annual Converntion of the Society for Personality and Social Psychology (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Li, W.Q., Ishiyama, A., & Yuki, M. |
| 2. 発表標題 Why people in "collectivistic cultures" hide their prosocial behaviors: Relational mobility matters |
| 3. 学会等名 The Virtual 2021 International Association for Cross-Cultural Psychology (IACCP) Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 前田友吾・結城雅樹 |
| 2. 発表標題 ポジティブ状況における羞恥感情の文化差 関係流動性の役割に関する社会生態心理学的分析 |
| 3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 前田友吾・結城雅樹 |
| 2. 発表標題 ネガティブ・ポジティブ状況における羞恥の文化差とその要因 関係流動性の役割 |
| 3. 学会等名 日本心理学会第83回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Maeda, Y. & Yuki, M. |
| 2. 発表標題 Lower relational mobility leads to stronger embarrassment for success. The mediating role of "tall poppy belief" |
| 3. 学会等名 2020 Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Maeda, Y. & Yuki, M. |
| 2. 発表標題 Proud or embarrassed? Relational mobility explains cultural differences in reactions to success |
| 3. 学会等名 25th International Congress of Cross-Cultural Psychology (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 前田友吾・結城雅樹 |
| 2. 発表標題 関係流動性が成功状況での感情経験の文化差を生むメカニズム 動機付け機能仮説の検討 |
| 3. 学会等名 日本心理学会第85回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Maeda, Y. & Yuki, M. |
| 2. 発表標題 Why does relational mobility moderate pride and embarrassment in success? A test of a motivational function hypothesis |
| 3. 学会等名 2022 Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology, Atlanta, Georgia, United States. (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 小楠なつき・結城雅樹 |
| 2. 発表標題 人間社会における、関係流動性の変動とこれに伴う心理的順応 |
| 3. 学会等名 日本生態学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yuki, M., Maeda, Y., Zhang, F., & Li, W.Q. |
| 2. 発表標題 Low relational mobility, fear of sticking out, and embarrassment about remarkable contributions in the East Asian ecological context |
| 3. 学会等名 2020 Annual Convention of the Society for Personality and Social Psychology (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 結城雅樹 |
| 2. 発表標題 「心の文化差」を「社会差」で説明する |
| 3. 学会等名 2022年度心の科学集中レクチャー（京都大学人と社会の未来研究院）（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yuki, M. |
| 2. 発表標題 Low Relational Mobility, Fear of Sticking Out, and Concealment of Prosocial Behaviours |
| 3. 学会等名 Cooperation Colloquium (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yuki, M. |
| 2. 発表標題 Why are people in individualistic cultures more proactive in interpersonal relationships than in collectivistic cultures? The role of relational mobility |
| 3. 学会等名 C&V Webinar (Monthly Multidisciplinary Webinars on Culture and Values) (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yuki, M. |
| 2. 発表標題 Relational Mobility: A socio-ecological factor to explain cross-cultural differences in interpersonal behaviours |
| 3. 学会等名 Sussex University Psychology Department Colloquium (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|--|
| <p>The relational mobility portal http://relationalmobility.org/</p> |
|--|

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|------------------------------------|--------------------------------------|--|
| 研究協力者 | タルヘルム トーマス (Talhelm Thomas) | | University of Chicago, Booth School of Business, Associate Professor |
| 研究協力者 | シュゲ ジョアンナ (Schug Joanna) | | College of William & Mary, Department of Psychology, Associate Professor |
| 研究協力者 | 浜村 武 (Hamamura Takeshi) | | Curtin University, Faculty of Health Sciences, Senior Lecturer |
| 研究協力者 | 神 明里 (Jin Akari) | 北海道大学・大学院文学院・修士課程 (10101) | |
| 研究協力者 | 小楠 なつき (Ogusu Natsuki) | 北海道大学・大学院文学研究科・博士後期課程 (10101) | |
| 研究協力者 | 前田 友吾 (Maeda Yugo) | 北海道大学・大学院文学院・博士後期課程 (10101) | |
| 研究協力者 | 李 ブンショウ (Li Wen-Qiao) | 北海道大学・大学院文学院・博士後期課程 (10101) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|